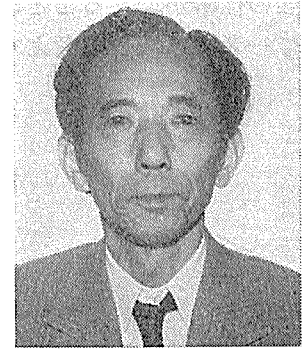


現場見学に思う

本 岡 順 二 郎*

筆者が大学に在学していた昭和 25, 6 年頃はようやく東京の復興が始まり、都心には工事中のビルが目立つようになっていた。新しいビルが珍しいこともあって、先輩を頼っての現場見学に行くことが流行していた。

当時見学した八重洲の鉄鋼ビルや青山の壁式 RC 造アパートの新築、焼けた歌舞伎座の補修工事など、工事現場での人と物との格闘が与える印象は強烈で、当時の記憶は今なお鮮やかである。PC の利用はすでにこの頃始まっていたので、これを見る機会があったら同様に強い印象を受けたと思われる。



車や時計などの商品を見てもその裏側の生産システムや働く人が感じられないのと同様に、竣工した建物からは建設中の工事現場の迫力は得られない。これが現場見学が強い印象を与える理由であろう。

現在ではビル工事がいたるところで行われているせいか学生に現場見学の意欲も少ないようで、レポートや遊ぶことが多過ぎてそのひまも無いようである。いつまでも学生でいたいと願うモラトリアム人間が増えていて、むしろ現場に近づきたくないと潜在的に考えているのかも知れない。

現場実習をカリキュラムに取り入れて休暇期間中に現場を体験させる大学もあるが、一般的には困難で、せいぜいスライドで紹介する程度である。このような状況下でも個人的努力で任意参加の見学会をお膳立てする先生もいて敬意に値する。建設会社の中には採用決定後現場見学会を行う例も多く、感激して帰って来る学生も少なくない。現在の学生は遊びの資金はアルバイトで稼ぐのが普通で、このため設計事務所や現場に通う例は多い。時給が高く仕事の楽なところに人気が集まることになり、多少動機不純の感はあるが、この場合でもそれなりに現場の雰囲気の影響を受けて帰ってくる。

従来、建築学科卒業生の多くは建設技術者として直接工事にかかわる、いわゆるハードの分野に配置されてきた。しかし最近では建設業の守備範囲が拡がりつつあり、これに伴ってむしろソフトの分野に配置される傾向がある。

施主が建物を発注し、工事が行われ、竣工後引き渡される三つの過程の中で、主に二段目の工事だけを引き受けていた建設業が、積極的にその前後の過程にかかわることになりつつある。つまり、前段の建物を必要とする企画、経営の立案段階から後段のビルの維持管理、不動産売買に至るすべてに関与しようとするもので、一事業が 10 年以上のロングレンジで行われることになる。

建築学科の出身者が建設業の中で現場に直接関係のない以上のような分野ですでに多数活躍しており、今後はさらにこの分野に進出することが予想されている。幾つかの大学でこの分野を対象とする学科やコースを設置し、または計画しているのは以上の理由によるものである。このような学科のカリキュラムは土木建築以外に不動産や民法など広い範囲になるが、建設業である限りは土木建築に根をもつ学科になるものと考えられている。

つまり、少なくとも建築系の学科ではその出身者が建築現場に直接関係のない分野に進出するこ

* 社団法人プレストレストコンクリート技術協会理事，日本大学理工学部教授

とが多くなりつつあるが、建築家あるいは建築技術者としての意識をもって活躍してほしいと考えるわけである。学生の期間に建築の原点である現場を見ることは建築的意識を植え付けるのに大きな効果があり、PCの現場見学は将来のPC建築の発展にも繋がるものであろう。

現場見学は計画する側、引き受ける側、さらには見学する側にも問題があつて、なかなか困難である。そこで、適当なPC工事がある場合、見学に差し支えない日時、場所を協会経由であらかじめ選定した大学の関連学科に通知し、学科での掲示により希望の学生は直接現場に行くことにすれば比較的繁雑さは少ない。見学者の人数の不確かさや応接で現場には迷惑がかかり、連絡事務で協会の仕事が増えることになるが、将来のPC発展のためだけでなく、広く後輩の育成の一助として一考されたいと考えている。